サバイバル・ツール

bloodmaria

サバイバル・ツール

　纏う影から草木たちが実体を覗かせる時刻。
　深山の沢辺りに佇むワタシは、紺碧に沈む薄闇の中でコーヒー豆を砕いていた。サラサラと砂利を鳴らす水音には相なれない雑音がコーヒーミルから響き渡る。未だ浅い眠りを見せる山中には、ずいぶんと不釣り合いな騒音に思えた。
『お前みたいなヤツは人命に関わる道具以外いらない。死にたくないならサバイバル・ツールだけで装備を軽くしろ。そんなものが、いざというとき何の役に立つ？』
　今日が山岳救助隊になって初めての仕事だった。その矢先、隊長に怒鳴られた原因がこのコーヒーミルである。隊長に反抗する気はサラサラないのだが、興奮して前日から満足に眠れていないワタシには夜明けのコーヒーが必要不可欠となっていた。だからこうして、隊長も他の隊員もまだ眠っているうちにキャンプ地から離れた沢辺りでコーヒー豆を砕いている。
　捜索は昨日のうちに終了していて、今日は下山することになっていた。
　遺体は別働隊が発見、回収したらしい。死んだ彼らはワタシよりも登山をなめていたようで、コーヒーミルはもちろんのことキャンプ装備はおろか、ラフな着の身着のままで沢登りをしていたという。
　捜索終了の無線連絡を受けた隊長と数名の隊員が妙なことで顔を曇らせていた。
『水が引いていたからな。イシザライの穴に入ったみたいだ。・・・・・・岩戸が壊れてる。とんでもないことをしてくれた。早く下山した方がいい』
　上流には川のど真ん中にイシザライと呼ばれる大岩がある。ちょうど鎌倉のように大岩は空洞を有していて、隣接する小さな岩が戸の役目を果たして出入り口を塞いでいた。出入り口を塞ぐ岩は幾度か変えられているようで、その都度わざわざ町から運ばれてきたものを置いているらしかった。
　名前があるのだろうから逸話があるのだろう。しかしイシザライの名前を知っている人間は、棺桶に片足を突っ込んだ年寄り連中やここの山に精通している者に限られていた。祀られているようには見えないし、大岩のことを知っている者も話したがらない。誰がどこまで何を知っているのかもわからない。
　確かなのは忌み嫌われているという点だけである。
　行き場のない濃霧があちこちに白い帯を漂わせていた。申し分のない天気になるだろう。下山する隊の足並みも早いものになる。眠気で足をもつれさせるわけにはいかない。
　ザリザリザリザリ。
　コーヒーミルが豆を砕いていく。
　ザリザリザリザリ。
　野鳥が遠い場所で抗議を囀る。
　ザリザリザリザリ。
　霧のたなびく沢の流れくる先で、白絹がはためいたように見えた。

ザリザリザリザリ。
――ザリザリザリザリ。
・・・・・・同じ音が遠く霧の中を伝ってくる。
ザリザリザリザリ。
ザリザリザリザリ。
・・・・・・・・・・・・・それは、すぐ背後で音を返した。
「――奇し。奇し。奇し。我がおるぞ」
声。仄暗い声。
全身の感覚が薄いガラスと化した直後に粉砕された。
しわがれた老婆の声と息遣いが一音一音、ワタシの背筋を氷の刃で撫で下ろしていく。
虚ろな気配は霧を媒体に恐怖を質量化していた。経験したことのない分類不能の戦慄がワタシを背後から覆い尽くそうとしている。
どうにもできない力がワタシを値ふみしていた。振り返れば自我など簡単に崩れ去るだろう。
「奇し。奇し。奇し。洗うか。喰らうか。我なら喰らえぬ」
ザリザリ、ザリ、ザ、ザリザリザリザリ。
ザリザリザリザリ。
竦んで震え慄くワタシは何故か、コーヒーミルを動かす腕の自由だけは守り抜いた。
止めた途端、恐るべき結末が自分に降りかかる気がしたのである。
もうひとつの音は不気味なほどに山へ溶け込んでいる。コーヒーミルとそっくりの音なのに、それは山が奏でるあらゆる音色に透けていたのだ。
どれくらいの巨顔がワタシの後頭部を睨めつけていたのか、柳の太枝になった葉が揺れるように、広がり散った白髪が視界を横切った。もうひとつの音は次第にワタシから離れて、キャンプ地へと進んで行った。

――朝陽が上端を見せ出した頃、ようやくワタシは恐怖に打ち勝った。躓きかけつつ、躊躇を払い、キャンプ地に戻ることにした。
隊員は全員起きていた。誰かが怪我をしたわけでもなく、誰かがいなくなったわけでもない。
焚き火のもとで隊長は背と肩を丸めて不格好に座っていた。横に立ったワタシを見上げて驚きの表情を見せ、持っていたコーヒーミルに目を見張った。また怒鳴られると思ったのに、隊長は混乱と諦念が綯い交ぜになった笑みをワタシへ向けてきた。
「・・・・・・そうか。そんな手があるのか。お前だけはちゃんと必要な装備をしてきたわけだ。装備不足はオレたちだったか」
笑う隊長にも。うな垂れる老練の隊員にも。重大な出来事に取り残されて困惑している若い隊員にも。
全員の額に小石程の痣が浮いていた。
下山したあと、若い隊員たちは自分たちを襲った出来事と受け入れねばならない事実を隊長に打ち明けられたようだ。

　呆然と立ち尽くす者、くず折れて泣く者、ワタシを恨めしそうに眺める者、隊員たちは頭を下げる隊長を前にして、思い思いに絶望をゆっくりと吟味しているらしかった。
　その後、職場の居心地に耐えられなくなったワタシは転属を余儀なくされた。未だにあの時、山で何が起きたのかはわからない。再び大岩が閉じられたという話を聞いた。
「いまをせいぜい楽しむさ。家畜なりに自由はあるだろうしな」
　別れ際の隊長の言葉を思い出して、ワタシは今日も朝を待つ薄闇の沢辺りでコーヒーミルを廻す。
　背後に現れるかもしれない、そっくりなもうひとつの音に怯えながら。